

エロスの軌跡（6）：『考察』から「共和国論」 へ：ノヴァーリスとトーマス・マン

福元, 圭太
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5474>

出版情報：言語文化論究. 10, pp.105-118, 1999-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

エロスの軌跡 (6)

—『考察』から「共和国論」へ：ノヴァーリスとトーマス・マン—

福元圭太

6-0. はじめに

6-1. 『非政治的人間の考察』とその後

6-2. 「共和国」講演におけるノヴァーリスの意味

6-0. はじめに

前稿「エロスの軌跡 (5)」¹⁾では、1919年2月11日に行われたハンス・ブリュアーの講演「ドイツ帝国、ユダヤ性、社会主義」が詳しく検討され、この講演に対してトーマス・マンがいかに留保なく賛辞をおくったかが分析された。もう一度結論のみを繰り返し、マンがブリュアーに「一言一句ほとんど違わず」代弁してもらった、と感じたことを列記すれば、ドイツは今やディアスポラの危機にさらされており、この危機を脱するには、新しい帝国のヴィジョンが必要であること、そのような帝国は決して啓蒙主義、合理主義、進歩主義といった「文明」の側からはもたらされず、非合理的な結合原理に基づいていなくてはならないこと、そのモデルは司祭と王を兼ね備えた指導者の元に、彼を愛する青年たちが集結するという、ホモ・エローティシユなものでなければならないこと、そして危機に立たされた保守的なものを救済するためには、革命的に新しいものが必要であるという保守革命の要請²⁾、となる。

またマンは、ブリュアーのこの講演の約7カ月後に、彼の主著である『男性社会における性愛の役割』の第2巻を読み、『非政治的人間の考察』もまたマン自身の「性的な倒錯の表現であるということは疑う余地がない」(Tgb. 17.9.1919)と日記にしたためることになるが、それはブリュアーの「エロスとはある人間を、その価値を度外視して肯定することである」というエロスの定義が、マンの「エローティッシェ・イロニー」の概念と寸分違わず符合していたことに起因していた³⁾。

その深部においては「性的な倒錯の表現」であった『非政治的人間の考察』から4年ののち、マンはこの書物での主張を180度回転させたかのように読める「ドイツ共和国について」という講演を行う。本稿以降ではこの、マンのいわゆる「転向」問題の消息を追うことになるが、本稿ではまず、この4年の間のマンの発言を分析し、そののちに「共和国」講演に取り組みなければならない。この講演の分析に当たっても、私たちの関心はその深部に横たわるエロスのなものに向けられることになるが、本稿では特にこの講演におけるノヴァーリスの意味を検討する。エロスの問題が前面に出てくるブリュアーとホイットマンに関してはしたがって、次稿に譲ることになる。

6-1. 『非政治的人間の考察』とその後

『非政治的人間の考察』がマン自身の「性的な倒錯の表現」であったという議論は前稿までに詳述したのでここでは繰り返さないが、この書物の性格を、性的なものを一応度外視してもう一度簡明に要約するとすれば、クラウス・マンの次の文にまさるものはないであろう。

この本（『考察』）は、戦争によって破壊された詩人の、きわめて独特な、いや唯一無二のドキュメントであり、長く、苦悩に満ちた自己との対話である。文学的に見ればこの本は大傑作、偉業である。しかし政治的な観点からすればカタストロフィーだ。[...]ゲーテ、ショーペンハウアー、そしてニーチェの弟子である詩人は、ゲルマンの文化の悲劇的な偉大さを西欧的文明の戦闘的ヒューマニズムの攻撃から擁護することを、自分の最も高貴な義務であると考えたのだ。⁴⁾

「私は君主制を望む」(12-261)と明記した『非政治的人間の考察』が1918年の10月に出版されて1カ月後の11月には、ドイツ第二帝政はあえなく崩壊し、君主制は廃止される。すなわち終戦と同時にマンは「ゲルマン的文化の悲劇的な偉大さ」を「西欧的文明の戦闘的ヒューマニズムの攻撃」から守ってくれるかに見えた現実政治の基盤を失うことになるのだ。しかし自分がこれから進むべき方向を即座に見通すことは当然困難であり、マンは「方向感覚」を完全に失ってしまう。

文学作品の執筆にあたって、マンは完全にプライベートな領域に引きこもり、1925年の『魔の山』に至るまでは「二つの牧歌」⁹⁾を—愛犬との散歩を題材にした『主人と犬』(1919年)と、末娘のエリーザベットの誕生(1918年4月28日)、洗礼(同10月23日)に続いて書き始められたヘクサメター、『幼子の歌』(1919年)を—発表しただけだった。ただし、それに並行して、第一次世界大戦と『考察』によって中断されていた『魔の山』の執筆は、数週間の準備期間を経て、1919年の4月20日には再開されていた。エッセイの領域ではマン中期の代表的なものである「ゲーテとトルストイ」が1921年に生まれている。

一方政治的には、以下で分析するように、マンは様々な主義や主張の間を揺れ動くことになるのだが、例えば1921年末には、まだ『考察』の旗幟が鮮明な「独仏関係の問題」(12-604ff.)等を執筆している(発表は1922年)。

伝記的に重要なことは、以前から反目しあっていたが、『考察』で決裂が決定的になった兄ハインリヒと、1922年の1月に和解していることである。「ヨーロッパの兄弟喧嘩」と称されたこの二人の反目は、再びクラウス・マンの表現を借りれば、まさに「ゲルマン的文化の悲劇的な偉大さ」と「西欧的文明の戦闘的ヒューマニズム」の、「ドイツ保守主義」と「フランス共和主義」の反目であった。したがって兄弟の和解というそれ自体は些末な事件も、文化的には重要であるといつてよいだろう。

そして『考察』の出版からちょうど4年後の1922年の10月、マンはゲルハルト・ハウプトマンの60歳の誕生日を記念して講演を行うことになる。「私は君主制を望む」と明言したマンがこの「共和国」講演の結びに「共和国万歳！」(11-852)と叫び、一大センセーションを惹き起こすことになるのである。

この間、マンの心中では何が起こっていたのであろう。マンの1918年から1922年までの変遷、つまり君主制の擁護者から共和国の支持者までの変遷は、決して直線的なものではなく、また例えばのちに触れるラーテナウの暗殺といった明確な転機はあったものの、その一点だけがマンの共和国への信条告白にとって決定的であったとも言い難い。

さらに重要なことは、マンが支持する共和国とはどのようなものでなければならなかったのか、ということを確認することである。第二の問題、つまりマンがどのような共和国を支持していたのかという問題は、「共和国」講演の分析を待つことにし、まずは18年から22年までのマンの心情の変遷を、その政治的発言を手がかりに追ってみよう。この間のマンの消息を最も生々しく伝えている、1975年から封印の解かれ始めた日記と、いくつかの書簡から、時間軸に沿ってマンの声を拾ってみる。

先述したハンス・ブリューアーの講演「ドイツ帝国、ユダヤ性、社会主義」をマンが直接聞きに行ったのは1919年2月11日のことであった。講演に刺激されて「文明」ではなく、非合理的ドイツ「文化」の側から新しい保守主義が生まれることを期待したマンではあったが、その興奮も覚めぬ翌日にはもう、エーベルトが大統領に選出されたことを「ドイツの尊厳と自信の復権」(Tgb. 12.2.1919)として歓迎している。同じ日の日記ではまた、ブリューアーが講演で激賞したグスタフ・ランダウアーの『社会主義へ集結せよ』を書店で買い求めたと記されている。同年2月22日、23日の記述からは、マンがランダウアーのこのアナーキーな社会主義を夢見る書を共感をもって読み進んだことがわかる(Das Buch von Landauer bietet mir viel, viel Sympathisches. Tgb. 23.2.1919)。

約2カ月後の1919年4月5日の日記には、その2日後の1919年4月7日に成立が宣言され、わずか25日余りのちの5月2日には白軍によって解体させられることになるミュンヘンのレーテ共和国について、「ばかげた騒ぎにすぎない」にせよ、コミニズムが「反協商(Entente-feindlich)」、つまり反フランス、反イギリス、すなわち「反西歐」である限りにおいて、「コミニズムをほとんど愛している」と記している。これはもちろんコミニズムへの真面目な信条告白とは言えないが、「西歐」的なものよりはコミニズムのほうがまだ、というマンの態度がよく表れている。その10日後、1919年4月15日には、白軍によるレーテ鎮圧の銃弾が飛び交うミュンヘンで、マンは次のような感慨を抱く。「唯物論的啓蒙的ないわゆるプロレタリア文化の専横に対する私の懐疑と嫌悪は激しいものだ。しかし古い社会経済体制が終焉を迎え、もはや修復不可能であることほどはっきりしたことない[...]、社会革命は、拒否すべきものの拒否、すなわち協商側の勝利の拒否を意味するのだ。」マンはつまりレーテ共和国はそれではないとはいえ、ある種の社会革命が不可避であることを感じているのである。

1919年4月17日の日記にマンは、3日後の4月20日から執筆が再開されることになる『魔の山』の構想を練る中で、次のようにしたためている。「キリスト教的神の国を人間的なものに刷新すること、つまり如何ようにか超越的に満たされている人間による神の国」をこの小説で扱おう、そしてハンス・カストルブを最終的に戦争の只中へ送り出すのは、「新しいものを求める戦いの始まりへ彼を解き放つことを意味するのだ」。ハンスが『魔の山』を降りて戦場へ向かうのが1914年のことであるならば、「如何ようにか超越的に満たされている人間による神の国」の誕生は1918年ではなく、1914年であることになる。のちにみる「共

和国」講演でもマンはその誕生を1918年ではなく、1914年であると強調しているが（11-811）、この日の日記には「共和国」論の構想が『魔の山』とクロスオーバーしているということがはっきりと表れていて興味深い。ちなみにこの日の日記には「ブンゲ」と命名されており、まだ「ナフタ」という名をもらっていない人物と、ゼッテムブリーニの主張は両方とも「正しくもあり、間違っている」と述べられている。キリスト教的中世の復活でもなく、理性的啓蒙の実践でもない、あるいはそのどちらでもある新たなものが要請されているのである。

5月5日の日記でマンは白軍による共産主義勢力の鎮圧を歓迎し、「ごろつき連中（Crapule）の支配下よりは軍事独裁政権下の方がずっとのびのびと呼吸ができる」と記している。マンの持って生まれたブルジョワ精神はやはり、理論としてのボルシェヴィズムには共感できても、生活としてのそれは耐え難いものであると感じていたようである。

同年9月、マンは集中的にブリューアーを読んでいる。その著書である『男性社会における性愛の役割』の第2巻を読み始めた、という記述が9月13日にみられる。そしてあの、「夜ブリューアーを読む。一面的ではあるが真実だ。私自身にとって『考察』もまた私の性的な倒錯の表現であるということは疑う余地がない」という問題のパスセージが、9月17日に記されるのだ。これについてはしかし、前稿までに詳述したのでここでは割愛する。

3か月後の1919年12月22日、23日にマンはシュペングラーの『プロシア主義と社会主義』を読み、フリードリヒ大王時代のプロシアに一種の軍隊的社会主義が実現されているというその主張⁶⁾に大いに共感を示している。トーマス・マンとシュペングラーという興味ある取り合わせは、別個の問題として新たに論じなければならないが、その後、マンのシュペングラーに対する評価は下降の一途をたどることになる⁷⁾。

年が明けて20年の1月18日、カイザーリング伯に宛てた手紙でマンは、カイザーリング伯が、近い将来再び保守主義がドイツにおいて最も発言力をもつに至るだろう、と語ったことに賛同し、ヴァーグナーの「ドイツ人は保守的である」という言葉は永遠の真実である、としたためる。そして「かの名高い『精神と魂の再統合』のためには「ドイツ保守主義の精神化（die Vergeistigung des deutschen Konservativismus）」が必要であると述べている⁸⁾。保守主義の擁護のためには保守主義を革新することが必要であるという「保守革命」の考え方にマンが属していたことは、この手紙からも明らかである。翌日の日記（1920年1月19日）にも、保守主義の何らかの革新をマンが模索していたことを示す記述がある。すなわちマンは、何人かのジャーナリストとの会合で、「ドイツの保守主義と社会主義の結合が必要であること、そこにこそ未来があり、デモクラシーには未来はない」と語ったのである。

「保守の革新」という目標にとって、保守主義者の中でも程度の低い連中の不穏な策動は、マンにとっては頭痛の種でしかなかった。1920年3月16日、エルンスト・ベルトラム宛ての手紙には、カップー揆⁹⁾は歓迎すべきものではなく、むしろ「保守的な理念の体面を大いに傷つけるもの（eine schwere Kompromittierung der konservativen Idee）」にならないであろうか、という懸念を表明している¹⁰⁾。

その半年後の1920年9月5日、ユリウス・バーブに宛てた手紙では、「中世においてはある種のドイツのコミュニズムが実現されており、我々の事態もおおよそその方向へ進展するであろう」こと、また自分がインターナショナルな社会主義ではなく、「むしろそれぞれ

の民族が、それぞれ独特の社会主義をもつであろうこと」を信じている旨が語られる¹¹⁾。中世的なドイツ的 Kommunismus ないしドイツの民族性に根差した社会主義がどのようなものなのかはここでは定義されていないが、それが唯物論的経済史観に基づいたものであるとは考えにくい。マンのアクセントは「 Kommunismus ないし社会主義」の方にあるのではなく、「ドイツ的ないしドイツの民族性」の方にあることは、「ドイツ共和国」の場合も同様であることがのちに分析されるであろう。

1921年7月25日から8月20日にかけて執筆された長大な文学エッセイ「ゲーテとトルストイ」にも触れておきたい。このエッセイでマンは、シラーの「素朴」と「情感」という二元論にしたがって「ゲーテとトルストイ」、「シラーとドストエフスキー」という二つの異なったタイプを提示する(9-61)。「客観的なもの、健康なもの、古典的なもの」であるゲーテ＝トルストイの「素朴」と「主観的なもの、病的なもの、ロマン的なもの」であるシラー＝ドストエフスキーの「情感」—この二つは優劣の問題ではなく、前者を神と呼ぶことができるのであれば、後者は聖者ともいべきものであることが語られていく(9-63)。そして最後には、二元論のどちらにも与せず、どちらにも距離をとる、あの中庸のパトスであるイロニーが持ち出される。「素朴」と「情感」、神と聖者、自然と精神の中間に留保してあることを、ドイツ人はイロニーとして愛好する、それは自らの置かれた「地理的状况」(9-171)からもドイツ人にはふさわしいことだ、中間のパトスはまた「中庸のモラルであり、中庸のエトス」(9-171)なのだ、とされ、創造的な非決定状態が擁護されるのである。この文学エッセイにもしかし当時の政治的的日常は侵入してくる。マンは蔓延しつつある右翼的国粹主義を「ヴォータン崇拜」、「ロマン主義的野蛮」と呼び、そのような「民族的野蛮人を演じてみせることは、ラインの岸辺に西欧文明の胸壁をうちたてようとしているあのフランスの文明の愛国者たちの正当性を完全に認めることになる」(9-169)のだと警告を発する。そして今求められていることはドイツの偉大な人文主義的伝統を擁護することであり、それによって『ラテン文明』の要求の誤謬(9-170)をも明確にすることができるという。そしてその人文主義的伝統理念を実践すべき形態としてマンが持ち出すのは、またしてもドイツ的な社会主義である。「下劣な経済的唯物論のなかで、あまりに長くその精神的生命を消耗してきた私たちドイツの社会主義にとっては、つねに『魂を込めてギリシア人の国』を探し求めてきた、かのより高きドイツ精神につながりを見つけてくださいことほど大切なことはありません。今日政治的な観点からいえば、社会主義は私たちの本来の国民的な党派です。しかし誇張していえば、カール・マルクスがフリードリヒ・ヘルダーリンを読むまでは、社会主義は真にその国民的使命に応えることはできないのです。そしてこの出会いは今まさに実現されようとしているように思われます」(9-170)。「カール・マルクスがフリードリヒ・ヘルダーリンを読む」というドイツ的な社会主義のビジョンを、マンは20年代後半までもち続けており、1928年の「文化と社会主義」においてもこの比喩は繰り返されることとなる。『考察』を「大規模な退却戦—ドイツ的ロマン主義的な市民性の、最後の、そして最も遅かった戦い—見込みのないことは百も承知で交えた戦い、それゆえまた高貴な心を伴わないではない戦い」(12-640f.)と擁護したこの論文で、マルクスの社会主義は民族および共同体というドイツ的なイデーを階級というイデーによって分解してしまうので(12-647)「ドイツ文化」の信奉者には不評であったが、いまは「民族の観念も政治化」し、「共同体概念も社会的、社会主義的なものへ転移」(12-648)

すべきすべきときである、「保守的な文化観念と革命的な社会思想の、一簡潔に言えば—ギリシアとモスクワとの同盟」が要請されている、とされるのである。そしてそのあとに「ゲーテとトルストイ」のあの一節が引かれる。「私はこう述べた —カール・マルクスがフリードリヒ・ヘルダーリンを読み終えたとき、そのときにドイツは初めて良いものになるであろう、そして両者の出会いは、今まさに行われようとしている、と」(12-649)。

話を元に戻し、マンの心情の変遷を再び追ってみる。1921年12月1日の日記には『非政治的人間の考察』の再版のための校正刷りが上がってくる。「私は校正刷りを心を痛めることなく、いやしばしば快哉を叫びながら読んだ (Ich lese sie [Korrekturen; K.F.] ohne Qual, oft mit Beifall.)」とある。『考察』に手が入られたのは1921年の9月18日から20日のことであり、まだハインリヒとの和解の前である。この版で削除されたところも『考察』の中心となるドイツ文化の西欧文明に対する擁護に関わる場所ではない。削除されたのは具体的にはロマン・ロランとの論争部分が12ページ分、選挙権批判に関する部分が4ページ分、戦争のフマニテートを強調した部分が2ページ分、またハインリヒの「ゾラ論」に関する6ページ分に関しては表現がおだやかにされている¹²⁾。つまり、フランスおよびハインリヒとの和解、選挙制というデモクラシーと、戦争を否定する平和主義との和解が準備されたわけであって、この再版をもってマンの「変節」を云々することはできない。実は上にあげた「文化と社会主義」は、この校正がマンの「変節」の端緒であると決めつけたアルトゥール・ヒューブシャー (Arthur Hübscher) の新聞記事¹³⁾への論駁文なのである。いずれにせよマンは1921年の終わりには、『考察』のスタンスからは大きくかけ離れているとはいえないどころか、むしろ『考察』の立場を新しい現実とどのように矛盾なく結び付けるかに腐心しているように思える。

以上のようにマンの政治的発言には、『考察』の保守主義のさらなる深化、保守主義と社会主義の精神的結合、ドイツ的共産主義ないしは社会主義の構想等、いわゆる「ドイツ保守革命派」の諸潮流と多分にクロスオーバーする部分がある。またランダウアーのアナキーな社会主義やシュペングラーのプロシア的な軍隊的社会主義への共感も見られる。つまり18年から22年に向かってマンは徐々に共和主義者に変化してきたということだけでなく、かなり広い振幅で様々な思考の実験の間を行きつ戻りつしているということができる。しかし重要な点は、マンが一貫して「反協商」、つまり反西欧、反文明のスタンスを崩していない点である。振幅が広いとはいえ、マンが真に西欧的「文明」の側に足を踏み入れることはなかったのだ。マンはすなわち来るべき政治形態が「文明」の側からもたらされるとは考えていない。つまりそれはあくまでドイツ的なものでなければならなかったのだ。「共和国」講演で要請されているあるべき「ドイツ共和国」の姿もやはり、西欧の文明的なデモクラシーの共和国ではなく、そのドイツ的なパリアントであるということは十分に予測できる。

それではマンは、ドイツ的な共和国とは具体的にはどのようなものでなければならぬと考えていたのであろうか。以下で「共和国」講演を様々な観点から分析し、マンにとっての共和国の相貌を明らかにしたい。ただし本稿においては特にノヴァーリスとの関連で講演を読み解くことに限定せざるをえない。

6-2. 「共和国」講演におけるノヴァーリスの意味

1922年10月13日、ベルリンのベートーヴェン・ザールで行われたこの講演は当初ゲルハルト・ハウプトマンの60歳の誕生日のための記事として構想されていた。しかし1922年6月24日に起きた外相ヴァルター・ラーテナウの右翼青年たちによる暗殺を機に、講演はヴァイマル共和国を擁護する性格のものへと変化していく¹⁴⁾。1922年7月8日付、エルンスト・ベルトラム宛ての手紙にこのようにある。

ラーテナウの最期は私にとっても大変なショックでした。[...]私はハウプトマンの誕生日の記事を一種のマニフェストに仕上げ、私の講演を聞きに来る青年たちの良心に訴えかけようと思っています。¹⁵⁾

この講演は『新展望』誌 (Neue Rundschau) の1922年11月号に掲載されたが、翌23年にはフィッシャー社から単独の印刷物として刊行される。その際に付けられた「まえがき」にマンは18年の『考察』とこの「共和国」講演との関係を次のように述べている。

[...] 私は志操の変化 (Sinnesänderung) などというものを知らない。ことによると、思想 (Gedanken) は変えたかもしれない —しかし志操 (Sinn) は変えたことはない。[...]思想というものは、詭弁的に聞こえるかもしれないが、つねに目的に至る手段、志操に奉仕する道具に過ぎない。[...]したがってこの文章の筆者が部分的には『非政治的人間』の書のと違う思想を弁護したとしても、そこには思想相互の矛盾があるだけであり、筆者自身との矛盾は存在しない。[...] この共和国への励ましは、『考察』の指針の正確な、今日に至るまで断絶することのなかった継続であり、その志操 (Gesinnung) には変化がない。ここでも『考察』の志操、すなわちドイツ的人間性 (Menschlichkeit) の志操は否定されていないのだ。(11-809f.)

「ドイツ的人間性」でもってマンが何を言おうとしているのか、ここではさしあたって二つの段階に分けて考えてみよう。まずは形容詞の部分である「ドイツ的」について、次に「フマニテート (Humanität ないしは Menschlichkeit)」について考察を加えることにする。

「勝利、自由意志、国民的高揚の過程においてではなく、敗北、虚脱の過程において生じ、無力感、外国支配、恥辱と結び付いているように見える」(11-823)共和国を、共和国は「一つの運命であり、これに対しては『運命愛』こそ唯一正しい態度なのだ」(11-822)と「反抗的で難攻不落の民衆にも納得のいくものにするために (auch stutzigen und trutzigen Volksgenossen plausibel zu machen)」(11-832)、マンがどうしても必要としたことは、ドイツ的な伝統と新しい共和国を裂け目なくつなげることであった。そのためにマンが引き合いに出すのがドイツ・初期ロマン派の象徴的な人物であるノヴァーリスである。共和国を語る際、たとえばマンが愛読していたハインリヒ・ハイネではなく、保守革命派の愛読するノヴァーリス¹⁶⁾を援用することにおいてすでに、ドイツ的保守性と新しい共和国をなんとか和解させようとするマンの精神的離れ技が始まることになる。

マンはまず「反抗的で難攻不落の」聴衆のほとんどが、反フランス的感情、フランスへのルサンチマンを抱えていることを考慮して、フランス革命とその影響に対するノヴァーリスの批判を引いてくる。

ノヴァーリスとともに私は言いもしましたし、現在も言いますが、「今日ある形の王侯に反対して熱弁をふるい、新しいフランス流儀のうちにししか救いを許さず、共和国を代議形態においてしか認めず、第一次集会や選挙集会、執政内閣や委員会、市庁舎や自由の木が存在するところのみ共和国はあるなどと、反駁の余地のない調子で主張するような者たちは、精神が空虚で心貧しい哀れな俗物であり、その浅薄さ、内的貧困を、勝ち誇る流行の色鮮やかな旗や、世界主義という堂々たる仮面の背後に隠そうとする字句拘泥屋であって、こういう蛙、鼠のいくさの真の姿を露呈させるためには、非開化論者のような敵が相手として相応である」— (11-818; „Glauben und Liebe“ Nr. 23. N-Schr. II-490f. 強調はマンによる)

新しいフランス流儀、すなわち代議形態や第一次集会や選挙集会、執政内閣や委員会、市庁舎や「自由の木」のような表面的な形式が共和国をもたらすのではない、そういうことは字句拘泥屋の用件であり、共和国はあくまで心の問題なのだ、というのが上のノヴァーリスの引用からは読みとれる。クルツケの研究によれば、ドイツ・ロマン主義の反フランス革命的言辭を政治的保守主義の正当性の証拠にする傾向は、1914年から1945年におけるドイツの、特に「保守革命派」において顕著であるが、マンの上の引用も、ロマン主義者による啓蒙とフランス革命に対する戦いが「元型的 (archetypisch) に反復されている」¹⁷⁾一例ととることもできる。しかし引用の最後の強調されている部分は、注意して読む必要がある。ロマン主義者が、そしてマンが軽蔑する「新しいフランス流儀」の敵対者とは「非開化論者」にほかならず、そして「真の対立は同じ平面においてのみ可能であることからすれば」(11-818)、ロマン主義はこの両者のはるかに上のレベルに位置することを言っているのである。「非開化論」、これをマンは「反動」、「粗野そのもの」と呼び、現在「ゲルマン的誠実」の美名のもとに行われていることは「センチメンタルな粗野」に過ぎず、高貴で精神的なロマン主義の名には値しないと、低レベルの右翼的策動に釘をさす。「センチメンタルな非開化論が組織化されてテロルとなり、嫌悪すべき狂気の殺人行為によって国を冒瀆している」(11-818)、とはすなわちマティアス・エルツベルガーやヴァルター・ラーテナウが右翼の青年に暗殺されたテロルは、粗野な非開化論、国辱ものであり、断じて許し難いとマンは明言しているのだ。そしてマンはこの講演の意図を次のように述べる。

私の意図は、これをはっきり申し上げれば、必要な限り諸君を共和国のために獲得することであり、デモクラシーと呼ばれているもののために獲得することです。そして私は、デモクラシーという言葉に付着しているいかさまめいた雑音に対する嫌悪の気持ちから（私が諸君とともに分かち嫌悪感であります）これをフマニテート (Humanität) と呼んでいます — [...] このフマニテートのために諸君を獲得するのが私の意図であります。(11-819)

右翼のテロルから青年を引き離し、共和国へ、デモクラシーへ、いや「フマニテート」へと獲得するというのがマンの意図ということになる。ここですでに第二の問題、すなわちフマニテートの問題が現われ、それがデモクラシーと等置されているのだが、これについては論の後半でもう一度取り上げたい。

青年を共和国のために獲得するために、マンはさらにノヴァーリスを引用する。「『共和国は青年に従順な流体である。若者たちのあるところ共和国がある』とノヴァーリスは書きました。」(11-819; „Glauben und Liebe“ Nr. 59. N-Schr. II-501)

しかしこの引用はノヴァーリスの真意を伝えていないことが先行の研究で指摘されている。この言葉はノヴァーリスの『信仰と愛』からの引用であるが、これに続く部分は「結婚をしているものは真の君主制を望む」(„Glauben und Liebe“ Nr. 60. N-Schr. II-501) というものである。ハンス・アイヒナーはこう述べている。「20年代のドイツの青年をデモクラシーの思想に近づけるために、マンはノヴァーリスをさかんに引用するのだが、—それにはノヴァーリスの政治的な領域における立場の力づくの歪曲を必要とした (dazu bedurfte es einer gewaltsamen Umdeutung dessen, wofür Novalis auf dem Gebiet des Politischen stand)」¹⁸⁾。

さらにマンは、ノヴァーリスにおける君主制とデモクラシーとの関係について、以下のよう述べる。

ノヴァーリスについて言えば、この詩人は国王理念を考える場合、民主主義的、共和主義的立場を固持しようといつも心がけており、例えば国王が一人しかいないのは「経済から」である、もし儉約してことに当たる必要がないなら「我々は皆王であろう」と言っております。(11-834; „Allgemeines Brouillon“ Nr. 1129. N-Schr. III-474)

マンはこのようなノヴァーリスの国王理念を「王たちのデモクラシー」と呼んでいるが、これも聴衆の大半を占める立憲君主主義者の顔色をうかがいながらの引用ととれなくもない。そもそもロマン主義的でない近代啓蒙精神にとっては、真の君主制と真の共和国の並立は自己矛盾でしかないのだ。しかしながらマンが、ヴィルヘルムの第二帝政のような君主制の復活を望んでるのでは全くないことは、この講演における第二帝政の描写からも明らかである。「つい先ごろまで私たちに上に君臨していた勢力は」とマンは述べているが、「歴史によって聖化され、世襲の栄光の魔力という非常に押し付けがましい権威を備えていたので、卑俗な芝居がかったものに変質し、敬虔の念を抱いているものをすら当惑させるようになって久し」(11-821) かった、云々。また前皇帝は「疑いもなく装飾的な才能」であり、その才能がドイツを代表している様子は確かに面白いものだったが、「しかし当惑を覚えずにはいられませんでした — 私たちはそれに目をやると、苦笑しながら唇を噛み、ヨーロッパの他の人々の表情を眺め回し、彼らが、私たちがこの喜劇に責任ありとはしていない、とその表情の中に読みとろうとしたものでした」(11-827)と容赦ない。つまりマンにとって第二帝政の、特に末期は、「卑俗な芝居がかったもの」、自分にはその責任はないのだと弁解したくなるような喜劇にすぎなかったのだ。

共和国との和解のためにノヴァーリスが引用される箇所は他にもある。イギリス的ないしユダヤ的な精神と思われるがちな「商業精神 (Handelsgeist)」、きわめて非ドイツ的な「商業精神」についてのこのロマン主義詩人の見解である。ノヴァーリスはマンの聴衆の予想に反してこう書き記している。「商業精神は世界の精神である。それはまさに雄大な精神である。それはあらゆるものを活動させ、あらゆるものを結び合わせる。国々や諸都市や諸国民や芸術作品を覚醒させる。それは文化の精神であり、人類の完全化の精神である。」(11-840; „Allgemeines Brouillon“ Nr. 1059. N-Schr. III-464) マンはノヴァーリスのこの言葉を、聴衆の留保をも計算済みで、大げさに賛嘆してみせる。「皆さん、否定し難いことですが、これはデモクラシーであります。それどころか進歩でさえあります — ドイツロマン的な耳でこの言葉を聞くと、雑音がいろいろ聞こえてきますが、これは進歩であります！」(11-840)。

以上、ドイツの精神的伝統と共和国の非連続を連続的なものとするために、マンはノヴァーリスのフランス革命批判や君主制擁護といった発言で保守的な聴衆を取り込みながら、「青年の共和国」への期待や、ドイツの「商業精神」アレルギーの処方箋を書いてきた。しかしこの講演でマンにとって最も重要であったノヴァーリスの意味は、この詩人の、矛盾を高い次元において統合する理念、「第三の国」という理念にあった。つまり、マンにあっては特に20年代に、先に「ゲーテとトルストイ」でみたように、ドイツ的な中庸の強調、中庸のパトス、いやエトスの強調があるが、保守主義と革命、「スラブ精神にひそむ政治的神秘主義」と「ある種の西欧の無政府主義的急進個人主義」(11-835)、またボルシェヴィズムのロシアとデモクラシーの西欧との中間にあって、両者を止揚し、両者を総合して第三の国を実現させるのが、ドイツの使命であるという思考の流れのなかで、再びノヴァーリスが援用されるのだ。保守主義と革命についてノヴァーリスは何と語ったか。

両者は人間の胸中の抹殺しえぬ力である。こちらには古代への帰依、歴史的状態への愛着、父祖の記念碑や栄光ある国家的名門の記念碑に対する愛情、従順の喜びがあり、他方には魅力的な自由の感情、力ある活動領域の無条件な期待、新しく若々しいものへの歓喜、全ての国家同胞との自由闊達な接触、人間的な普遍妥当性に対する誇り、個人の権利と全体の財産に対する喜び、力強い市民感情がある。いずれも相手を破滅させようなどと望んではならない、あらゆる征服もここでは何の意味も持ちそうにない [...] (11-830; „Die Christenheit oder Europa“ N-Schr. III-522f.)

ノヴァーリスはこの両者の統合は「下等な意識の立場」では達成されえない、それが統合されるのは、この「カトリック思想のロマン主義詩人」は「ひとり、世俗的であると同時に超地上的である第三の要素 — 教権制の思想、教会の理念 (der hierarchische Gedanke, die Idee der Kirche)」(11-830) においてのみである、と言うのだ。マンはこの「世俗的であると同時に超地上的である」第三のものが『考察』で擁護されたドイツのフマニテートに他ならない、それこそがドイツ的な中庸のパトスであり、エトスなのだとおもうとする。

同じく「世俗的で超地上的である」他の「第三のもの」、すなわち社会的であると同時に内的、人間的であると同時に貴族的であり、中世趣味と啓蒙主義、神秘主義と理性とのあいだで、美しい、気品ある — あえていえばドイツ的な中庸を保つ「第三のもの」について私たちは知らないでしょうか。そして怒れる友らよ、真の存亡のときに当たって、私があの本（『考察』）によって、左右に目を配りながら、いや重大な圧力のもとで右よりは左に多く目を向けながら擁護したのは、まさにこの要素、すなわちフマニテートの要素ではなかったでしょうか。（11-830f.）

ノヴァーリスの「第三の国」は、その「キリスト教あるいはヨーロッパ」において展開された思想で、ノヴァーリスにとってのカトリック教会が果たしていた矛盾、対立の止揚の場、すなわち「第三の国」としての機能を、マンにおいてはドイツ共和国が果たすべきであるというのだ¹⁹⁾。ノヴァーリスのカトリック教は、マンにとってのデモクラシーになり、両者に共通する精神的伝統こそ、矛盾を統合する中庸のパトス、いやエトスとしてのドイツ的フマニテートということになる。しかも、『考察』でもそのドイツ的フマニテートが擁護されていたとすれば、支持する政治形態が君主制から共和国に変わったとはいえ、変節、転向云々はあたらなない、「思想 (Gedanken) は変えたかもしれないが志操 (Sinn) は変えたことはない」ということになるわけである。

以上のように、「社会的であると同時に内的、人間的であると同時に貴族的であり、中世趣味と啓蒙主義、神秘主義と理性とのあいだ」に、つまりドイツの文化的伝統である内面性、貴族性、中世へのあこがれ、神秘主義に拘泥せず、新しい文明の価値観である社会性、人間的平等、啓蒙主義と理性を多に取り入れつつ、両者の中庸にあるというドイツ的なフマニテート、あの『考察』においても擁護されていたこのドイツ的フマニテートこそ、ドイツ的な共和国、ドイツ的なデモクラシーであるというのが、ノヴァーリスの援用を持ってマンがロマン主義に共和国を接ぎ木しようとした真意であった。

マンはしかし、この矛盾、対立を止揚する「第三の国」としての中庸のパトス、中庸のエトスというドイツ的フマニテートの、政治的形態としてのデモクラシー概念に、もう一つ一見唐突な要素を結合させようとする。それはデモクラシーにおけるエロスの問題である。前者がノヴァーリスを軸に展開されていたとすれば、後者の後見人は、アメリカの詩人、ウォルト・ホイットマンである。次稿ではデモクラシーにおけるエロスの問題とウォルト・ホイットマン、そしてハンス・ブリュアーの関係について論じることになる。

注

トーマス・マンの作品に関しては以下の全集を用い、巻数とページを文中に（10-568）のように示した。

Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Frankfurt a. M., Fischer, 1990.

またトーマス・マンの日記に関しては以下のものを用い、必要と思われるところは、日付を文中に（Tgb. 19.12.1918）のように示した。

Thomas Mann: *Tagebücher 1918-1921*. Hrsg. von Peter de Mendelssohn, Frankfurt a. M., Fischer, 1979.

さらにノヴァーリスからの引用に関しては以下の著作集を用い、巻数とページを文中に(N-Schr. II-490)のように示した。

Novalis: *Schriften. Die Werke Friedrich von Hardenbergs*. Hrsg. von Paul Kluckhohn und Richard Samuel, Stuttgart, Kohlhammer Verlag, 1960.

- 1) 福元圭太: 「エロスの軌跡 (5)」『独仏文学研究』第48号所収、九州大学独仏文学研究会、1998年、91-108頁。
- 2) 同上98頁。
- 3) 同上101頁。
- 4) Klaus Mann: *Der Wendepunkt. Ein Lebensbericht*. Reinbeck bei Hamburg, Rowohlt, 1981, S. 60.
- 5) マンは「主人と犬」と「幼子の歌」の2作品を合本にして「二つの牧歌」(Zwei Idyllen)の副題で出版している。*Herr und Hund/Gesang von Kindchen. Zwei Idyllen*. Berlin, S. Fischer, 1919.
- 6) 「社会主義」というのはここではマルクスによる唯物論的なものではなく、シュペングラーはこの語をプロイセン主義の同義語として用いている。この論文の序文には次のようにある。「重要なことは、ドイツの社会主義をマルクスから解放することである。ドイツの社会主義を解放するのである。というのもそれ以外に社会主義はないからである。[...] 我々ドイツ人は社会主義者である。[...] 古プロイセン精神と社会主義の考え方は、今日兄弟の間の憎悪のように、互いに憎しみ合っている、両者は同一のものである。」 „... es gilt, den deutschen Sozialismus von Marx zu befreien. Den deutschen, denn es gibt keinen anderen. [...] Wir Deutsche sind Sozialisten [...] Altpreußischer Geist und sozialistische Gesinnung, die sich heute mit dem Hasse von Brüdern hassen, sind ein und dasselbe.“ Vgl. Oswald Spengler: *Preußentum und Sozialismus*. München, C. H. Beck, 1920, S. 4.
- 7) 例えば「共和国論」の中のシュペングラーへの言及(11-841f.)あるいは „Über die Lehre Spenglers“ (1924, 10-172ff.)。
- 8) Thomas Mann: *Briefe 1889-1936*. Hrsg. von Erika Mann, Fischer, 1979, S. 173.
- 9) カップー揆は1920年3月12日に起きた右翼クーデタ。ヴェルサイユ条約の軍縮条項に反対するカップやリユトヴィッツらが反政府クーデタを起こし、右派のエアーハルト旅団がベルリンへ侵攻した。国防相ノスケはゼークト将軍に国防軍による鎮圧を要請したが、ゼークト将軍はこれを拒否。結局政府は翌13日にドレスデン、ついでシュトゥットガルトに移り、国民にゼネストによる抵抗を呼びかけた。これが効を奏し、カップらはベルリン占領からわずか4日後の17日にスウェーデンに亡命した。
- 10) *Thomas Mann an Ernst Bertram. Briefe aus den Jahren 1910-1955*. Hrsg. von Inge Jens. Pfullingen, Verlag Günther Neske, 1960, S. 88.
- 11) Thomas Mann: *Briefe 1889-1936*. a. a. O., S. 183.
- 12) Vgl. Hermann Kurzke: *Epoche-Werke-Wirkung*. München, C. H. Beck, 2. Auflage, 1985, S. 136. またこの改訂箇所をすべてあげた資料としては、Vgl. Ernst Keller: *Der unpolitische Deutsche. Eine Studie zu den „Betrachtungen eines Unpolitischen“ von*

- Thomas Mann*. Bern und München, Franke, 1965, S. 141ff.
- 13) Vgl. Arthur Hübscher: „Metamorphosen... Die 'Betrachtungen eines Unpolitischen' einst und jetzt“. Münchner Neueste Nachrichten, 23. August 1927. In: *Thomas Mann im Urteil seiner Zeit*. Hrsg. von Klaus Schröter. Hamburg, Wegner Verlag, 1969, S. 155ff. ヒュープツシャーは1887年生まれの文芸批評家で、『南ドイツ月報』(Süddeutsche Monatshefte)の編集者でもあった。
- 14) ラーテナウ暗殺の前年、1921年の8月26日にも、当時の蔵相、マティアス・エルツベルガー (Matthias Erzberger) が右翼のテロにより暗殺されている。エルツベルガーは1918年11月11日に休戦条約に調印した人物で、「ドイツを敵に売り渡した11月の犯罪者」の一人として右翼の攻撃の的であった。
- 15) *Thomas Mann an Ernst Bertram*. a. a. O., S. 112.
- 16) Vgl. Armin Mohler: *Die Konservative Revolution in Deutschland 1918-1932. Ein Handbuch*. Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 4. Aufl. 1994, S. 174. ここでモーラーは Novalis, Adam Müller, Ernst Moritz Arndt らを現代の保守主義の Klassiker としている。また Arthur Moeller van den Bruck も自分の著作をノヴァーリスに献じている。Vgl. Hermann Kurzke: *Romantik und Konservatismus. Das „politische“ Werk Friedrich von Hardenbergs (Novalis) im Horizont seiner Wirkungsgeschichte*. München, Wilhelm Fink, 1983, S. 36.
- 17) Ebd., S. 36.
- 18) Hans Eichner: „Thomas Mann und die deutsche Romantik“. In: *Das Nachleben der Romantik in der modernen deutschen Literatur*. Heidelberg, Lothar Stiehm Verlag, 1969, S. 155.
- 19) 「第三の国」を語る場合、12世紀イタリアの修道院長、ヨアキム・フォン・フィオーレの千年王国論を避けて通ることはできまい。ノヴァーリスも直接にはないが、レッシングの『人類の教育』 („Die Erziehung des Menschengeschlechtes“) を通じてヨアキム主義を知っていたと思われるが、本稿ではこれについて深入りすることはできない。

Die Spur des Eros (6)

—Von den „Betrachtungen“ zur „Republikrede“:

Novalis und Thomas Mann—

Keita FUKUMOTO

Die Rede „Von Deutscher Republik“ von Thomas Mann, gehalten am 30. 10. 1922 in Berlin, erregte großes Aufsehen, da sich Thomas Mann, der in seinem großen Essay „Betrachtungen eines Unpolitischen“ (1918) das konservative Deutschland und die Monarchie zu verteidigen schien, in seiner Rede 1922 zur Republik bekennt. Man spricht von Abkehr und Verrat Thomas Manns, aber bei genauerer Analyse der Republikrede wird erkennbar, dass sich das von Thomas Mann nicht so eindeutig behaupten lässt. Er wisse „von keiner Sinnesänderung“, er habe vielleicht seine „Gedanken verändert“— nicht aber seinen Sinn. Das Kern, oder nach Thomas Mann, der Sinn der „Betrachtungen“ bestand, mit einem Wort, in Nachdenken über „die deutsche Humanität“. Thomas Mann behauptet, dass der höchste Wert, der auch in der Deutschen Republik verwirklicht werden soll, ein und dasselbe ist und bleibt, nämlich die deutsche Humanität, deswegen könne von Abkehr und Verrat keine Rede sein.

Weniger wichtig scheint die Frage, ob dieses Argument sophistisch klingt oder nicht. Entscheidend ist, was Thomas Mann mit dem Wort „die deutsche Humanität“ meint. Sie ist für Thomas Mann das „Dritte“, das ebenfalls „weltlich und überirdisch“ ist, d. h. „sozial und innerlich, menschlich und aristokratisch zugleich ist und zwischen Romantizismus und Aufklärung, zwischen Mystik und Ratio“ eine deutsche „Mitte“ hält. Der Kronzeuge des Begriffes dieser deutschen „Mitte“ war für Thomas Mann der Romantiker Friedrich von Hardenberg (Novalis). In der zweiten Hälfte dieses Aufsatzes wird die Frage beantwortet, welche Rolle Novalis in dieser Rede spielt.